

## 新・島根の中山間地から Work as Life

### 第5回

### 「災害と復興とケア」

野中 浩一



#### 1. 輪島の2025年8月

島根から石川まで車で7時間、そして金沢市からバスで約3時間。輪島に行ってきた。(一社)生涯活躍のまち推進協議会から下記のような内容のメールをいただいたことがきっかけだった。

能登半島、なかでも輪島市および能登町で約3,800戸の仮設住宅の見守り支援を行っていること。

能登半島地震による直接死228人に対し、災害関連死は397人になったこと(7月9日時点)。

災害関連死の防止を主な目的として見守り支援をしていること、そして当該活動は災害支援に留まらない地域づくりにつながるものであり、4月20日以降、輪島市内3カ所で、地域住民に集会、食事、入浴、福祉サービス、雇用の場を提供するコミュニティセンターを立ち上げたこと。

このメールを見て、パソコンでボランティア登録を済ませ、ほんの10日間、見守り支援活動に加わってきた。

以下の写真は、決して被害が大きい特別な場所というわけではなく、私が現地で生活するうえで日々通っていた道を撮ったものである。(※1)





これらの写真だけを見ると、復興がまったく進んでいないのではないかと感じる人がいるかもしれない。

しかし実際に行ってみた感覚では、災害から 1 年半の間で地震や豪雨によって崩れた家の多くは片付けられ、主要道路の陥没やのり面のがけ崩れや仮設住宅の建設などライフラインにつながる復旧が驚くべきスピードで進んでいる印象であった。

それでも、今なお各所でトラックや重機が多数稼働しており、復旧または新興すべき課題が山積しているように感じられた。

### ◎これまでの災害復興の動きと今後の展望

内閣府 <https://www.bousai.go.jp/updates/r60101notojishin/1nenkan.html>

石川県 <https://www.pref.ishikawa.lg.jp/kouhou/hot/motto-2025winter/dekigoto.html>

## 2. お風呂と食事で全員集合

ボランティアをしている期間、お風呂と食事のために通った「コミセン（コミュニティ・センター）」のマリントウン BASE では、定食を食べているときによく 1970 年代の曲が流れていた。ときに<sup>まどかひろし</sup>門広志だったり、ときにドリフターズだったり。47 歳の私が生まれた頃の曲である。



この輪島のコミセン。一般的に言うコミセンとは作りが違う。お風呂と食堂がメインになっていて、そこに自由に集うこともでき、お土産の物販もある。

こうした生活になくなくてはならないお風呂と食事のインフラ機能を兼ね備えたコミセン。2025 年に 4/20 「コミセン マリントウン BASE」、5/4 「コミセン 門前 BASE」、6/8 「コミセン<sup>ふげし</sup>鳳至BASE」が、復興の拠点として立て続けに作られた。

これらの施設は、2015 年 12 月、社会福祉法人<sup>ぶっしえん</sup>佛子園、公益社団法人青年海外協力協会によるジョイントベンチャーによる地域共生拠点「輪島 KABULET（カブーレ）」の相似形のような存在だ。

コミセンにお風呂や食堂があると聞くと驚くかもしれない。私は公民館やコミセンというと、市民活動をする場所という認識であった。

私と同じような認識を持つ人は、ネット検索で、第二次世界大戦後に GHQ が作成したナトコ映画を見てもらうと面白い。戦後の日本の公民館には、パン屋、歯医者、美容院など、その地域にないサービスを

実現したり、簡素な結婚式といった地域の慣例にない取り組みをしていたことが分かる（※2）。

◎ごちゃまぜで街づくり 地域共生拠点

輪島のコミセン BASE <https://wajima-kabulet.jp/info/163/>

輪島 KABULET <https://wajima-kabulet.jp/town/index.html>

### 3. 地震災害から1年半、豪雨災害から1年

能登半島の輪島市に10日間滞在して、仮設住宅の訪問支援のボランティアに参加させてもらった。日々ボランティア数名が、仮設住宅を2人1組でまわりながら、お話を聞く。



写真は「一般社団法人 生涯活躍のまち推進協議会」のホームページより <https://shougaikatsuyaku.town/news/>

ボランティアの拠点づくりや募集をしている青年海外協力協会（JOCA）の職員さんと、集まったボランティアさん達と、仮設住宅を1戸1戸まわり、事前情報を勘案しながらお話を聞く。

ここで地震災害から1年半、豪雨災害から1年が経った今の能登の状況を、転出、仮設住宅、復興計画の観点から見ていきたい。

#### <転出状況>

輪島市、珠洲市、能登町、穴水町を合わせた奥能登地域では、「6月1日時点の奥能登地域の人口は推計で4万9052人と、去年1月1日時点の5万5213人と比べ6161人、率にして11.2%の減少となり、ふるさとを離れてほかの地域に移る動きが続いて」いる。わずか1年半の間に分かっているだけで11.2%も転出していることの影響は小さくない。2025年の奥能登地域の65歳以上の老年人口の割合は50%を超えており、生産年齢人口の流出により高齢化が加速している可能性が容易に想像される（※3）。

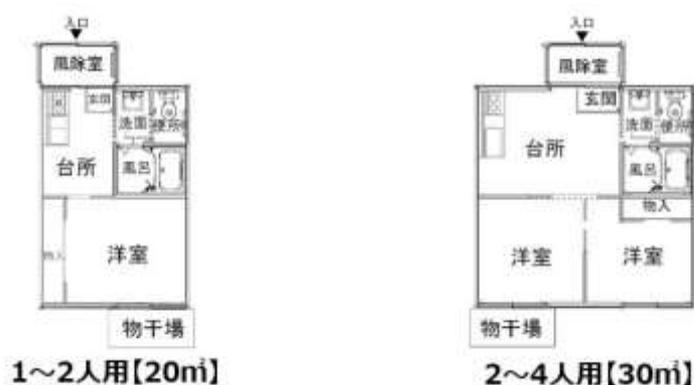
（NHK <https://www3.nhk.or.jp/news/html/20250701/k10014849001000.html>）

## <仮設住宅>

下記の写真のような仮設住宅に、被災した人々が暮らしている。「今回の地震では、石川県内で11万6282棟の住宅に被害が生じ」、「県内の地震の被災者9390世帯、1万9681人が仮設住宅で暮らしている。」

(毎日新聞 <https://mainichi.jp/articles/20250701/k00/00m/040/229000c>)

建設時期やエリアによって色々な形の仮設住宅があるが、1～2人用は1Kで4畳半一間と台所といった間取りである。なお、仮設住宅がどのように分布しているかは、下記ZENRINの地図を参照されたい。



画像は石川県のホームページより <https://www.pref.ishikawa.lg.jp/kenju/saigai/r6oukyuukasetsujuutaku.html>)



ZENRIN 石川県応急仮設住宅マップ [https://www.zenrin.co.jp/product/article/noto\\_kasetsu\\_map/index.html](https://www.zenrin.co.jp/product/article/noto_kasetsu_map/index.html)

## <今後の展望と困難感>

震災から1年・豪雨から半年で約7000戸の仮設住宅が供給され、そこから半年を経た7月時点では被害を受けた3万棟以上の住宅が公費解体されるなど、復興への道のりは着実に進んでいる。

一方で期待されている公営住宅は、用地確保・測量→造成と設計→工事といった過程を経なければ建築できず、輪島では早くも令和10年以降の入居予定となっている。誰もが復興を急ぎ頑張っている中ではあるものの、最初の入居まであと3年というハードルが仮設住宅の高齢者に立ちはだかる。

### ◎復興についての情報

石川県 復興公営住宅の整備状況 [https://www.pref.ishikawa.lg.jp/kenju/fukkou\\_kouei\\_seibi.html](https://www.pref.ishikawa.lg.jp/kenju/fukkou_kouei_seibi.html)

仮設住宅での暮らしについて、概ねにおいて満足している人、他所にも拠りどころや荷物の置き場がある人がある一方で、仮設住宅にしか居場所がなく、狭い中での家族との関係性の困難や、大病を患っていたり足腰を悪くしている中でしんどさを我慢しながら寝起きしている人もいる。

現在の仮設住宅に、実は空いている部屋（特に大人数用の空き部屋）があることやほぼ使われていない部屋があることを踏まえば、利用実態と困難世帯とを調査して再配分をすることで、公営住宅が入居可能になる3年後を待たずに、現状に強い困難を抱える世帯の利便性を上げることが可能になると思われる。

ただしこの被災地でも聞かれるように、同じ被災者同士、よそと比較してしまう状況や、それによる自己嫌悪、妬みや嫉みの感情がある。この点は非常にデリケートな領域であり、仮設住宅の再配分や公営住宅の入居選考において、この比較から生じる感情は、円滑な進行に水を差しかねない要因であろう。また、自身が住民でもありながら数々のクレームと向き合ってきた行政職員としても頭が痛い問題であろうと想像される。

被災から1年半が経ち、現在まで仮設住宅住まいをしている人の中には、やはり生まれ育った地元で暮らしたい人、もとの場所に家を再建する予定の人、すでに高齢で家の再建や他所に移る経済的な余裕がない人、病気がちだったり心身の障害があって出ていく意欲自体が湧かない人など、様々であると感じている。

仮設住宅住まいの高齢者の中には、都会地に息子または娘家族の家があり、そこに移り住むことを試したケースもある。しかし後日談として、実際に行ってみるとやる事がなくて辛い思いをしたといった話も少なくない。安全で広くて便利。自分の部屋もある。けれど、そこに自分がいる必然性がない。行ける場所があることは贅沢だと思いつつ一方で、やる事がなくて辛さに耐えることはできない。自分の裁量で家事をする、できる範囲で畑仕事をする、当たり前家族の世話をし、顔見知りのご近所さんと話をすると目に見えない時間の積み重ねが、日々を支えていることが実感され、輪島に戻る。

豪雨で地域の姿が変わってしまったとしても、馴染みの「場所と人」、そして自分を取り巻く「関係と役割」があることは、日々を生きるうえで変わらぬ土台である。今回輪島に行き復興の様子を見聞きする中で、この「場所と人」「関係と役割」を再構築することの大切さと、そのための試みが随所に感じられた。

## 4. ケアをするではなく、存在がケアになる

震災と復興。その一部になりたいと考え、今回輪島を訪れた。私がなにかしらの行動をしたいと感じたのは、震災後の豪雨災害のニュースを見た時だった。復興支援や心のケアといった言葉があるが、実際に被災地に行く身として、正直何かができるような気はしていなかった。むしろ、地震と豪雨による家族、家、地域といった人生の大切な繋がりに対する圧倒的な被害と、1年半経った今もその影響を受け続ける人々がいる中で、何もできないかもしれないという思いがあり、しかし一方で何かできることがないか知りたい気持ちもあり輪島を訪れた。

私が輪島を訪ねた時点で、住む家があり、食べるものがあり、衛生状態も悪くない印象であった。ただし住環境や移動の利便性については、仮設住宅があるエリアの違いや、各家庭の事情によってかなり差がある印象を受けた。仮設住宅の傍には公民館や交流の場があり、そこでは高齢者向けの体操やレクリエーションが行われていた。さらに漁師や海女の仕事や輪島塗の仕事など、地場産業も少しずつだが着実に動き出している印象を受けた。そうした中でも災害関連死があり、訪問支援という役割があった。

たった10日間の滞在、わずか72時間のボランティア活動の中であったが、長らく被災地に関わり続けてきた職員さんやボランティアさんの存在の力を日々感じていた。

どこにでも座り込んで笑顔で住民と話し込む人、高齢者にとって分かりにくい公営住宅の計画や家賃設定などを繰り返し繰り返し丁寧に解説する人、訪問している時間はとにかく楽しい時間にしたいと全力トークをする人、予定外や時間外でも関わった高齢者のその後が気になってしょうがない人たちがそこにいた。支援やケアといった形式ばったものではなく自分事として繋がりを結ぶその姿には、孤立や絶望や無力感に訴えかける強い力を感じた。

\*\*\*\*\*

### <注釈>

#### ※1 写真

ボランティアの時間外に撮影した写真である

#### ※2 ナトコ映画

この話は島根大学の社会教育士講座「生涯学習概論」の牧野篤先生の講義の受け売りであることをお断りしておきたい

※3 老年人口

日本全体の老年人口の割合は、2024年9月時点で29.3%である。